

長特研だより

第107号



発行：長崎県特別支援教育研究会
事務局：県立川棚特別支援学校
編集校：県立希望が丘高等特別支援学校
発行日：平成29年12月6日

平成29年度長崎県特別支援教育研究会

秋季研修会報告

平成29年10月18日（水）、東彼杵総合会館において開催された秋季研修会の講演内容について報告します。

演題：「困り感をもつ児童への支援
～学校現場における重層的な支援体制とは～」

講師：西九州大学 子ども学部心理カウンセリング学科
西村 喜文 先生

●講師紹介

西村 喜文 先生

西九州大学子ども学部心理カウンセリング学科長、教授
臨床心理学博士 臨床心理士
西九州大学臨床心理学相談センター 相談員
佐世保市教育センター教育相談スーパーバイザー
佐賀県青少年健全育成審議委員会委員
小城市いじめ対策協議会委員長
児童養護施設スーパーバイザー(長崎県)



●講演内容

1 発達障害をどう理解するか

- ・発達障害（developmental disabilities）：脳の機能に関する障害
- ・発達障害：自閉症、アスペルガー症候群、その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するもの。（発達障害者支援法 2005）

2005年に発達障害者支援法が施行され、10年が経ち、ようやく今学校現場に、発達障害者や発達障害者支援法に基づいた支援が行われるようになった。学校現場に特別

支援教育が根付いてきた。

教育における発達障害は、2007年に文部科学省が発達障害支援法と整合性があるように定義した。発達障害は、自閉症、高機能自閉症、学習障害、注意欠陥多動性障害を想定している。

特別支援教育を行うのであれば、日本における障害の定義の変遷をしっかりと整理する必要がある。

2 特別支援教育の変遷

2007年から特別支援教育が始動した。特別支援教育を行うには、特別支援教育を担う先生だけでなく、教育相談の先生、生徒指導の先生など、様々な先生の支援体制の再編をしたものが底辺にあるべきだ。

通常学級には、学習面や対人関係面で支援が必要な子どもたちがいるのが現状である。学校現場には、個に重点を置いた指導をしなければならない児童生徒が多くいる。この子どもたちに対してどのように対応していくのが今後の課題である。



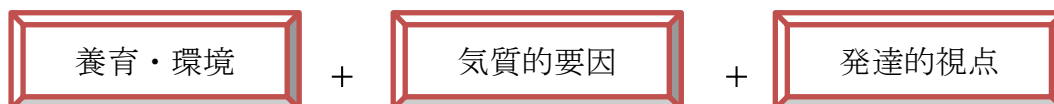
今の特別支援教育の課題は、支援の多様化である。ここには、他職種との連携が必要である。

- ①「学習の遅れ」「多動性、衝動性」「コミュニケーション能力の低下」などを抱えた児童・生徒への特別支援教育の充実。
- ②児童期、思春期の発達障害者への社会的支援。
- ③不登校や引きこもりを含めた地域に根差した心の支援体制づくり。
- ④保護者への対応

教室からこぼれ落ちていく子ども達を支えることが特別支援教育だと思う。その子ども達が精神的な自立を含めた社会の中での自立をしてほしいと思う。

3 児童・生徒の捉え方

<三つの側面> この側面から子どもの姿を捉える。



① 養育・環境

家庭でどのような空気（温かい、冷たい、怖い、寂しい）を感じてきたのか？
今までどのような言葉のシャワーを浴びてきたのか(優しい言葉、暴言など)？

家庭で否定を受けている子どもは、学校でまた厳しくされても拒絶をするだけで響かない。

②気質的要因

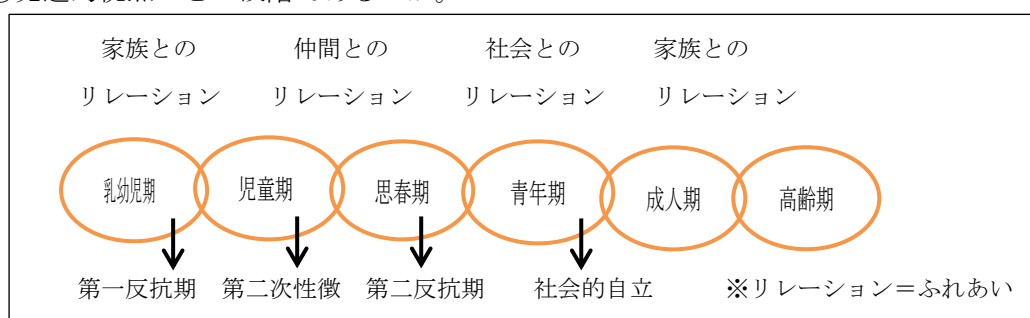
<三つ組みの困難>→どこにどのような困難さをもっているのか。

●**対人**：対人・社会面での相互的關係性の困難さ、想像力の困難さ、コミュニケーションの困難さ

●**学習**：読み・書き・計算の困難さ

●**心の理論**：他者の心的状態（思考、感情、意図、欲求など）を想像、推論する能力の弱さ→視覚、聴覚の過敏さ 衝動性・多動性をもつ子どもの特徴でもある。

③発達の視点→どの段階であるのか。



○乳幼児期：家族や身近な子ども同士の直接的な対人関係が中心：**土台づくり**

○児童期：集団生活の中での役割関係に基づく社会的関係の広がり：**仲間づくり**

○思春期：児童期と成人期の狭間、子どもにも大人にも属さない時期：**自分づくり**

④児童・生徒の困難さの背景

- ・学習技術の習得の欠如：読み書き計算【生きる力】の困難さ、座学の習慣、生活の中での未学習
- ・対人スキルの習得の欠如：親子関係、対人関係の中で学習の希薄
→「学校に行けない」、「教室に入れない」につながる。



⑤レッテルに対する修正の仕方

- ・光背効果 (halo effect)：人物評価において、最初に好ましい特性に注意がむくと全体的によい評価をし、悪い特性に目がむくと悪い人物評価をしてしまう現象。
→教師は気になる児童生徒のどこを認知していくか。
- ・ラベリング理論：レッテルをはることが、自己認知やアイデンティティに影響を及ぼし、レッテルに合致するような振る舞いをする事。
- ・ピグマリオン効果 (教師期待効果)：児童生徒に対する教師の期待が児童生徒の態度や行動に影響を及ぼし、教師の期待した方向に変化させる現象。
→自己肯定感の低い児童生徒は時間をかけながら希望を与えていく必要がある。

4 インクルージョンとは

インクルージョンとは「包み込むこと」である。「包括教育、包含教育と訳され、多様な教育的ニーズのある子どもを包含した教育を通常学級で行っていく考え」である。決して、すべての特別支援学校や特別支援学級の児童生徒が通常学級の児童生徒と交流をするということではない、と考える。インクルージョンの本当の意味をもう一度捉えなおすことが必要である。



困難さをもつ子どもは、不安や不快さをこれ以上体験したくないと訴え身体化・行動化を起こしていることがあり、そのような場合、集団学習の前に学習（学習力・対人力）が十分であるかどうかの再吟味が必要である。

①レディネス（準備）の問題

- ・学習の準備ができているか。（学習に取り組む力があるか。）
- ・対人関係がうまく取れるかどうか。
- ・気質か、養育環境か。発達の視点から見極める必要がある。



5 児童の行動をどう理解するのか

児童・生徒の見えにくさと分かりにくさの背景にある、言葉にならない「ことば」を理解することが大切である。人間は、「ことば」でのやりとりができる。だからこそ、「ことば」を大切にしてほしい。

①うまくいえない「ことば」

本心をうまく表現できない。「めんどくさい」「べつに」などの曖昧な表現。「うるさい」などの拒絶的表現。伝えたいこととは正反対の表現。これらは、**生徒の言葉の背後にあるものを考えてみる。**

②行動で訴える「ことば」

手のかかる生徒→「手をかけてほしい」、気になる生徒→「気にかけてほしい」
児童・生徒の問題行動の背景には「ことば」が存在する。

③身体で訴える「ことば」

心の葛藤が身体の「こり」となり表れる。身体症状の背後には「やすませて！」の「ことば」が存在する。身体をいたわることで心もいたわる。

④夢の「ことば」

つらさや苦しが多いと「空想の世界」に入る。現実がつらいと夢の世界で過ごすことが多くなる。→ **現実の世界の「良さ」を知らせる。**

6 特別支援教育の重層的支援

小学校、中学校の通常学級には、教室にいないという児童生徒がいる。これだけ児童生徒が多様化している中、今何が必要かと考えると、限られた人数の中での教員同士の工夫（話し合いや連携）であると思う。教員の交流事業をきちんと還元し、学校全体に浸透していくことが必要である。

教室に入ることができない、こぼれ落ちる児童生徒に対し、受け皿をきちんと作り、横の連携で大きな器となるように学校のシステムを構築するとともに、医療機関や児童相談所などの他職種や地域との連携も必要である。

必要な援助を必要な形で必要な子どもに与えられる様にしていくことが大切である。

7 教育と心の支援

- ・「教育」は「働きかけの知」である。
即解決を求める。即効性がある。
- ・「心の支援」は「支える知」である。
受け身と待つ力が必要である。
→この二つを教育現場でどう融合させていくのか、を考える。
- ・子どものための支援であるのだから、個別の教育支援計画等は、児童生徒と共に話し合いながら立てていく。
- ・3か月間は同じ支援を続けること。同じ関わりを行い効果がない場合は、支援の見直しが必要である。

